

論文

「人文主義」における2つの顔——本居宣長、ロレンツォ・ヴァッラ、そして人文主義のモダニティをめぐる矛盾する史学史

ジェイソン・モーガン (麗澤大学准教授)
(森由美子 訳)

要旨

イタリアの思想家・論客であるロレンツォ・ヴァッラは今日、ヒューマニズム(人文主義)の開祖の一人とみなされている。ヒューマニズムとは、カトリック教会の政治的な影響力に対抗し、合理主義と世俗主義の原則に則り、西洋の社会を再構成するという思想だ。その社会再構築の一環として、ヴァッラは、古代の真正とされていた書物に対して批判的なアプローチを取り、スコラ哲学や中世において彼が考えたラテン語の墮落を克服し、ラテン語本来の雄弁さを取り戻すことを提唱した。本居宣長は日本の思想家・宗教哲学者で、日本が政治・文化的に特異な存在であるとする国学に勤しんだ。その過程で、宣長はヴァッラと多くの面で手法を同じくし、特に、漢文で書かれた文章を大和言葉で読む、古代書物に対して批判的なアプローチを取った。また、宣長ら国学者は仏教、儒教などの日本の宗教以外の影響力を弱めたいと考えていた。日本の文化や知的議論から中国をはじめ海外の影響を排除できれば、日本は大陸にある近隣国とは異なった国としてより独立し、独自の意識を確立できると、宣長は考えていた。しかし現在、ヴァッラは初期人文主義の重要な思想家とされているが、宣長に関しては、20世紀の「ファシズム」の先駆者として西洋の歴史学に刻まれ、不信感を持って見られがちだ。西洋の学界において宣長とヴァッラへの史学史的な評価に大きな違いがあることは、日本や西洋以外の社会、または宗教全般に対する根深い偏見があることを示している。

キーワード

ヒューマニズム、ロレンツォ・ヴァッラ、本居宣長、ファシズム、前モダニティ、モダニティ、宗教、国学

はじめに

イタリアの思想家・論客であるロレンツォ・ヴァッラ(1407~1457)は今日、ヒューマニズムの開祖の一人とみなされている。ヒューマニズムとは、カトリック教会の政治的な影響力に対抗し、合理主義と世俗主義の原則に則り、西洋の社会を再構成するという思想だ。その社会再構築の一環として、ヴァッラは、古代の真正とされていた書物に対して批判的なアプローチを取り、スコラ哲学や中世において彼が考えたラテン語の墮落を克服し、ラテン語本来の雄弁さを取り戻すことを提唱した。¹例えば、ヴァッラはコンスタンティヌス帝(272~337)が教皇に権限を譲った証拠文書とされる「コンスタンティヌ

スの寄進状」の文章分析を行った結果、偽造と結論付けた。² この結論は、現在の学問においても再確認されている。³ ヴァッラは、反宗教主義者ではなかったものの、宗教（さらに政治）の権力の基盤について疑問を投げかけることを支持していた。ヴァッラにとって、古代の出典に立ち戻り、西洋、特に古代ローマの伝統を批判的に研究することが、社会の確固たる再構築を行う上で必要不可欠だったのだ。

本居宣長（1730～1807）は、日本の思想家・宗教哲学者で、日本が政治・文化的に特異な存在であるとする国学に勤しんだ。⁴ その過程で、宣長はヴァッラと多くの面で手法を同じくし、特に、漢文で書かれた文章を大和言葉で読む、古代書物に対して批判的なアプローチを取った。⁵ また、宣長ら国学者は、仏教、儒教など、日本の宗教以外の影響力を弱めたいと考えていた。日本の文化や知的議論から中国をはじめ海外の影響を排除できれば、日本は大陸にある近隣国とは異なった国として、より独立し、独自の意識を確立できると、宣長は考えていた。宣長も反宗教者ではなかった。それどころか、確固たる信仰を持ち、自身の役目の一つは、日本の文明の精神的な基礎へ回帰することだと考えていた。長年に渡って中国の影響が積み重なり、過度に浸透している状況を打破し、古代書物を真の大和言葉の読み方に戻すことで、現代で言うナショナル・アイデンティティという感覚を持つことができると、宣長は考えた。この感覚とは、日本が、中国の王朝をはじめアジア大陸の諸国とは異なる国のアイデンティティを持つことだ。

一見すると、ヴァッラと宣長は同様の課題に取り組んでいたように見える。両者は言語の改革者であり、自身にとって言語改革は信仰に新たな方向性を持たせることに直結した。ヴァッラと宣長には相違する点が多かったにしても、それぞれの文化的環境から生まれた古代文書へのアプローチについては非常に類似性があった。しかし、ヴァッラはスコラ哲学に果敢に異を唱え、彼の生きた時代に見られた「無思慮に導かれた自明の理」「言語上のもつれ」「史学史上の偽造」に対抗する「真実」を擁護した人物として捉えられることが多い。現在の学問では、ヴァッラを人文主義の父として扱うことが代表的だ。一方、宣長は筆者が見る限り、日本の人文主義の祖であったとは認められていない。⁶

実際、ヴァッラは人文主義初期の重要な人物とされているのに対して、宣長は20世紀の「ファシズム」の先駆者として西洋の歴史学者から不信感を持って見られがちだ。⁷ それどころか、宣長は、日本をナショナリズムの原型とも言える危険な思想の影響下に置いた人物であり、国学は20世紀の「ファシズム」の先駆的学問として捉えられている。⁸ 宣長の文語改革や、彼の時代が受け継いだ「史学史的な知恵」を批判的に調べるなどの取り組みは、「モダニティ（近代的なもの）」に向け、息苦しい中世の伝統から健全に脱出するための道程に日本を導いた功績があった、とは認められていない。代わりに、宣長は残念な自国文化至上主義者と見られ、国学は日本の道を誤らせ、1930～1940年代に起きた文明的な惨事につながったと見られている。

しかし、なぜこのような事態になったのか。ロレンツォ・ヴァッラを人文主義の祖として受け入れ、イタリアのハイモダニズム（社会および自然界を再編成する手段としての科学技術への不信心な信頼を特徴とする、現代性の一形態）につながるうねりの中に彼を位置付ける。そうすると、イタリアのエチオピア侵攻やベニト・ムッソリーニ（1883～1945）出現の責任を、おそらく特別嘆願なしに問わないことは難しくなる（本稿後半に記載されるように、我々の主張の援護にアントニオ・ Gumラシ（1891～1937）を加える

ことも可能であろうが)。もちろん、そのような因果関係を証明するには、歴史を過度に平坦化や歪曲化させることも必要になることを示唆している。ヴァッラは北アフリカ侵略を提案したわけではない（彼が称賛したローマ文明にとって、侵略はお手のものだった）。しかし、西洋、特に米国の学者が日本を研究すると、宣長・国学が満洲国・真珠湾攻撃への道を暗示させると、飛躍的な解釈をしてしまうことがある。

ロレンツォ・ヴァッラ

ロレンツォ・ヴァッラは、15世紀の初めにイタリア、おそらくローマで生まれた。⁹ 知的な興奮が湧き返る時代・場所に生まれ、ヴァッラは宗教と政治の世界、そして両者間の緊張の中で育った。ヴァッラの叔父はバチカンの役人で、ニコラウス5世（1397～1455）お抱えの言語学者になり、その後、カリストウス3世（1378～1458）の下で秘書を務めた。また、彼が不毛と感じた、後期のスコラ哲学の議論から抜け出す新たな道を示した論客として、そして異端者としても広く知られている。¹⁰

一方、恐らく、彼がスコラ哲学に異議を唱えたことから、ヴァッラは宗教に懐疑的だという印象を与えるかもしれない。彼はテキスト解析を用い、いわゆるコンスタンティヌスの寄進状の嘘を暴いたことで最も名が知れている。この寄進状は8世紀か9世紀の文書で、コンスタンティヌス帝がローマ教皇に、教会または世俗的な権限を渡す旨が書いてあるが、ヴァッラはこの文書が偽造されたと証明した。¹¹ ヴァッラがこの証明に使ったのは初期人文主義者が用いた言語学の技法で、これは後にアゴスティノー・スチュコ（1497～1548）やアンジェロ・ポリツィアーノ（1454～1494）によって大きく改良された。¹² 現代の学者、マウド・ヴァンヘーレン氏によると、ヴァッラは「彼の時代の政治的、宗教的、神学的なイデオロギーに疑問を投げかけた」という。¹³

しかし、ヴァッラは全く反宗教主義者ではなかった。¹⁴ ヴァンヘーレン氏によると、ヴァッラにとって、コンスタンティヌス帝がローマ帝国の皇帝として初めてキリスト教を信仰したことは、それまでの伝統的な福音信仰の終焉と、帝国の権力（インペリウム）と福音書にある精神的なメッセージ（福音伝道）を結合させるという誤りを意味していた。¹⁵ イアン・ハンター氏が補足で述べたように、ヴァッラは古代の文章の知識を「告白のため」に使った。例えば、ディオニュシオスが書いたとされていた神学の文献が、実は、後世の別人によって書かれていたことを突き止めた（偽ディオニュシオス文書）ことなどだ。¹⁶ ナンシー・ストリューヴァー氏は、コンスタンティヌスの寄進状を偽造と突き止めた事実は、ヴァッラにとって以下に比べてさほど重要ではなかったという。それは、受け継がれた知恵を覆したこと（偽造の突き止め）は、「(中世の大学の) 三学科のヒエラルキーを、修辞法を第一に、文法は次に、そして弁証法をその次に位置付け再定義し、そして文法と修辞法が人文主義の聖書解釈の道具として文献学に複雑に組み込まれ、人文主義の規律の模範」になったからだ指摘する。¹⁷ 振り返ってみれば、そして彼の当時の見解を考えれば、ヴァッラという人物は人文主義者だったのである。¹⁸

人文主義は複雑で多くの価値を内包した現象だが、人文主義者のほとんどは当時のスコラ哲学の制度尊重主義に懐疑的で、彼らの思想に基づいた時代にマッチした社会を構築することに熱心だったという点で結束していた。¹⁹ イタリアの学者、マルコ・スガルビー

氏は、ルネッサンスの人文主義者は「文学者か文献学者、弁論家であったが、哲学者ではなかったことは確か」と一つの学派の説を紹介している。²⁰ そして、この説に対して、スガルビー氏は、ロレンツォ・ヴァッラは立派な哲学者であったと論じるロディ・ナウター氏の著書も取り上げている。²¹ 学者のバージニア・コックス氏は、15世紀のベニスの状況を分析し、「15世紀に入って最初の30年間に生まれた貴族は、人文主義の教育を受けた第二世代」で、「共和国（ベニス）における人文主義の教育に対する社会制度的な認識に変化を及ぼした」と述べている。²²

ヴァッラが言語の研究に注力したのはさほど驚きではない。というのも、言語は人文学者が追求するものの中心にあったからだ。²³ 例えば、独立系の学者、カリン・スーザン・フェスター氏は、学者仲間のアラン・ペレイヤ氏の「中世後期、ルネッサンス初期の学者は（エデンの園で）アダムが使っていた純粋な言語を忠実に回復、または創り出す」ことを目指していたという説を取り上げている。²⁴ ペレイヤ氏によると、ヴァッラは古典ラテン語、つまりクインティリアヌス（35年頃～100）のラテン語は「完璧な言語」で、「十分に思考する上で不可欠」であると論じた。²⁵ ペレイヤ氏の説明によると、ヴァッラは「言語の単語や文法が、それらが表現する概念の構成要素になる」ように、「基本的には言語決定論で思考、言語、現実を捉える」ようになった。²⁶ また、哲学者で「知の営み」についての歴史を研究するピーター・A・レッドパス氏は、以下のように述べている。

ヴァッラは、抽象的な概念の内容を言語の初期の使われ方に見出している。元の実態は当初の使用法にあるとされている。「というのも、当初の使用法には書物に存在する意味を超越した、隠れた、または、あらかじめ意図された意味が含まれているからだ」。そして、元の実態は、人類の全ての学びの基礎となる。²⁷

この種の言語的な探究は、ヴァッラの時代やそれ以前から一般的に行われていた。例えば、デジデリウス・エラスムス（1466～1536）は、「res（もの）とverbum（言葉）の間に、ある種の本質的なつながりがあると信じていた」。しかし、「このつながりは常に不十分である必要があり、つなぐ方法はあるものの人間の言語で完全な意味を得られるものではない、というプラトン主義的な考え方」も持ち合わせていた。²⁸ エラスムスにとって、歴史学内外での『言葉、神の言葉、キリスト』の累積頂上の位置付けは、究極の現実を人間の言語でせいぜい反映しているにすぎない。ヴァッラと同様に、「エラスムスは紛れもなく、聖書がその読み手に与える影響力を最大限に回復するため、歴史に汚染された聖書の資料文書を浄化する任務を、敬虔な行為として考えていた。彼は調べていたパリンプセスト（以前に書かれた文字を消し、別の内容を上書きしたもの）に、誤解の痕跡がある文章や十分練られていない文章の下に隠れる純正な文章を、時折、文字通りに探したようだ」。²⁹ ヴァッラの宗教史の研究や言語学的、文献学的分析は、時に人文主義、つまり世俗主義、個人主義の傾向で溢れているが、ヴァッラは本居宣長と同様、世俗主義者では全くなかった。

次に、筆者がヴァッラと同等の位置付けだったと考える、本居宣長を調べて見よう。

本居宣長

本居宣長は、ロレンツォ・ヴァッラと同じく文献学者であった。³⁰ 宣長は伊勢の国・松坂、

現在の三重県に生まれた。1752年に、京都で堀景山(1689~1757)の下、医学と儒教を学び始めた。³¹ 宣長は、荻生徂徠(1666~1728)と僧侶の契沖(1640~1701)の解釈的なアプローチに影響を受けたほか、古代日本の言語への回帰を唱えた賀茂真淵(1697~1769)の門下生でもあった。³² 儀式、特に儒教の儀式に統治上の重要性を置いた徂徠とは違い、宣長は言葉や、さらに言葉が具現化し生み出す人間、神々と自然界の間のつながりに関心を持っていた。³³

宣長は後に、英語で「ナショナル・ラーニング」としばしば訳される国学に身を投じるが、国学は、精神的にはフランス語で表される「原点回帰」(ressourcement)や、大陸の影響力についての見直しという意味合いがより近いであろう。³⁴ イタリアのルネッサンスがそうであったように、国学の運動は、少なくともその大志において国家主義ではなかった。国学者は、その当時存在さえもしていなかった近代国家を樹立することには関心がなかった。むしろ、国学は古代の典籍に立ち戻り、国学の文献学者や政治思想家が、外国、つまり中国の影響で覆われ埋もれていると考えた、言語学的表現方法を復活させるものだ。³⁵

神道と日本の宗教、国政術の詳しい分析を英語で執筆する現代の学者の一人、マーク・テーウェン氏は、「哲学的内省や分析を行うための古代日本文化の基礎を形成した4つの要素があり、それが18世紀に和学と呼ばれる運動に結実した」と分析する。この和学こそが我々が国学と呼ぶもので、その4つの要素とは、「神への信仰」「古代日本語の書き言葉の価値の向上、和歌の鑑賞」「日本の古代宮廷社会の神話も含む歴史の記録(古事記、712年、日本書紀、720年)」「日本の皇統」であるという。³⁶ 4つの要素の中で、「理論化(つまり、特に和歌、神、天皇の地位の性格など、古代宮廷社会のテーマなどに関する新しい教えや慣習)の出発点は、ほぼ必然的に和歌になった」と、テーウェン氏は論じる。³⁷ 和歌が中心的役割を果たすのは、上記のように、国学は文献学を中心に探究したからである。テーウェン氏は、以下のように和歌を説明する。

中国から伝来した言葉や文章構造を排除したとされ、入念に純化した言語で書かれた和歌は、大陸文化に席卷される中で“日本”の本質を象徴するものとなった。この観念は、古代日本語の言葉の音は、歌人の心と世界、聞き手をつにする精神的、または美的な力を帯びているというものだ。この精神的な力は、「言霊」と呼ばれるようになり、後に日本語の「原型」とされる和歌の魔法のような価値を絶賛する重要な用語となった。³⁸

我々はここで困難な点に直面する。テーウェン氏が日本に引用符をつけたのは、彼がこの概念に対して懐疑的と思われるからである。³⁹ 宣長が天皇を神と論じたことは事実である。⁴⁰ この点は、現代の研究者が示すような躊躇を値引いて考えるべきだ。国家主義の原型と捉えるべきではないし、なおさらファシズムの原型とは理解すべきではない。現代の学者、特に英語圏の学者は、国学や宣長の著作に、ファシズムの原型を見る傾向にある。⁴¹

本居宣長や国学をファシズムの原型、ヴァッラを人文主義者とみなすのには大いに違和感がある(「人文主義」が醸し出す修辭的意味合いは、西洋では非常にポジティブで、ヴァッラは世俗の人文科学の先駆者としてほぼ例外なく好感されている)。宣長の探究は、ヴァッラのそれと多くの面で類似しているからである。例えば、宣長は「立ち返ること」、つまり、自国の文化が発展した起点になったと思われる、素晴らしい古代の文章から、彼が生きた時代の文化は隔絶されており、その起源に戻ろうと主張したのだ。彼の

「没後の門人」である平田篤胤(1776~1843)がそうしたように、宣長は桜が日本的だと強調し、「やまと心」の象徴だとしたのが一例だ。⁴² もちろん、ヴァッラは桜の讃歌を作曲したわけではない。しかし、古代ローマの精神、その核心になるものの復活を追求した。宣長の「ローマ」は古代日本だった。石川淳氏が宣長について以下のように記述している。

日常の事として風雅にいそしむためのみではなくて、古人のこころをさとるにも、古代のおもむきを知るも、道に入る手だとして、歌はいつもそこにあって古学との縁を切っても切れない。古歌の鑑賞にはとどまらず、歌はみずからはげんでこれを作る。⁴³

本居宣長を評したこの一節は、然るべき変更を加えた上でヴァッラの説明にも申し分なく使える。

当然、宣長は、国学の議論の基調を作った唯一の人物ではない。例えば、宣長の評判の多くは、篤胤のフィルターを通して生まれたものが多い。そして、この評判は、日本の20世紀、特に第二次世界大戦の大変動期においてフィルターにかけられた。日本の知の営みの歴史を研究する子安宣邦氏は、篤胤について以下のように記す。

明治維新の「王政復古」の活動や明治のごく初期の「祭政一致」などの政策に篤胤門の国学者がかかわったこともあって、篤胤は戦争前には宣長とならぶ高い評価を得ていた。しかし戦後、篤胤に与えられたのは、「狂信的国粹主義者」という評語をもってする非難のことばであった。戦争をはさんで激しい毀誉褒貶のうちにある篤胤を読み直すためには、「ためらい」ともいべき時間を経る必要があったし、読み直すべき新たな視点を構築する必要もあった。⁴⁴

ヴァッラは、古代ローマの散文の達人や美文家に関心を持ち、宣長は印象派的で過去の精神を呼び起こす韻文に惹かれていた。両者はともに時代のうねりの中で沈んでしまった黄金時代に回帰することで、自身が生きる時代を変えたいと望んでいた。宣長にとって、この黄金時代はどちらかといえばより近いところにあった。ほぼ全てが文献学的であったヴァッラとは違い、宣長は古き時代を蘇らせるのに美学、例えば桜の花びらがハラハラと踊るように散るようなことに目を向けることができるからだ。

それでも、彼の有名な理論である「もののあわれ」が明示するように、彼の美学の追求においても言葉は関心事であった。石川淳氏は以下のように記す。

モノノアワレ(略)は宣長の心が古歌古文において発明したもの、すなわちことばの綾という微妙な形式を取ってあらわれるべき思想である。(略)「歌は物のあはれをしるよりいであるものなり」とあって、「古今序に、やまと歌は、ひとの心をたねとして、万のことはとぞなれりけるとある。此ころといふがすなはち物のあはれをしる心也。」⁴⁵

ヴァッラは、宣長ほど古代を内在化しなかったが、両者の過去に対するアプローチの性質は非常に類似性があるということを認めなければならない。

現代の政治的分断

ヴァッラと宣長は、人生とライフワークにおける類似性があるにも関わらず、特に現在の研究方法において、著しい差異が生まれてきた。私の知る限りでは、両者の差異だけ

ではなく、彼らの比較的的を絞った研究はなされていない。しかし、彼らの置かれていた環境の間には大きな差がある。一方は、北イタリアの人文主義の背景、もう一方はファシズムの原型や国家主義の原型という負の含みがある。その含みは、20世紀半ばの歴史を、徳川時代の事象を見て決めつけている。これは、西ヨーロッパの学者が「歴史学的には意味をなさない」と避けがちな方法である（全く意味をなさないからだ）。

彼らの思想に政治性があることを疑っているわけではない。例えば、ヴァッラの思想の政治的意味合いは深い。人文主義の目的の一部は、政治の再構築、古代都市国家の思想や共通の人間性に対するスコラ哲学的ビジョンを再整理し、その時代の激しい要請に応える、巧みで鋭敏なアレンジメントをすることだった。⁴⁶ より直接的に言えば、人文主義者の多くは、スコラ哲学者の抽象的な世界ではなく、墮落の世界に生きたかったのだ。これは墮落した人類の本性を言い訳し、それとともに生きることだ。つまり、政治を巻き込むのだ。ヴァッラは、政治の世界とは全く無縁ではなかったのだ。

例えば、サラ・スティーバー・グラヴェル氏が指摘しているように、ヴァッラはラテン語、後にイタリア語がなぜ「世界共通語」として機能したか、そしてなぜギリシャ人が「言語的に政治的に結束することに失敗したのか」について理解することに腐心した。⁴⁷ また、ヴァッラ研究の第一人者、サルバトーレ・カンポレーレ氏は「ヴァッラが言語の非存在論化を急進的に進めた」と指摘したが、この点は、メリッサ・メリアム氏の言葉を借りると、コンスタンティヌス1世が、聖書にも勝る存在として築いた「Superstructure（上部構造）」である教会を転覆させる意図があった。そして、このことが、ヨーロッパはもちろん、それ以外の広範な地域の政治生活に大きな変化を急速にもたらすことになる。⁴⁸ さらに分析を進めると、ヴァッラを、信仰に基づいたスコラ哲学やペトルルカ（1304～1374）の世界に革命を起こした先駆者として位置付けることもできる。その位置付け自体は、セネカ（4BC頃～65AD）やキケロ（106BC～43年BC）の道徳観に基づく政治思想から、ニッコロ・マキャヴェリ（1469～1527）の道徳観念に基づかないパワー・ポリティクスや、マキャヴェリの弟子が進めた反宗教の思想までに及ぶ展開を意味する。⁴⁹

これがヴァッラの人文主義の歴史的文脈である。ヴァッラは過去に遡って、失われた純粋なキリスト教を取り戻したかったのだ。⁵⁰ さらに、彼はスコラ哲学を「全く行き過ぎた他界的禁欲主義」と捉え、それとは真逆の「快樂の理論」を取り戻したかったのだ。⁵¹ そのために、純粋な言語がある未来の世界の確立と、その後の国境の画定や国民国家確立へ向けた初期作業への前めりになるのは必然的なことだった。⁵² これらの抽象的概念（そして、カトリック教会が持つ超国家的な「上部構造—superstructure」の盤石な権威）から離れるには、人間の世界である政治に入ることだ。激動、またはニコラス・クザーヌス（1401～1464）が後に具体的に表現することになる矛盾の時代では、人文主義者は失われた過去を探究しながら、政治の未来を固める作業をしていたのだ。⁵³ ヴァッラの著作は、例えば、デビッド・マーシュ氏が書いているように、マーティン・ルターに「受容され」、ポスト人文主義の時代に向けた宗派、そして後の国家の境界を画定する先鋭的な動きの予兆になるのである。⁵⁴

宣長も、ヴァッラが生きた北イタリアのルネッサンス初期と同じような日本の激動の時代に生きたといえるだろう。江戸時代の秩序は、共和国や都市国家がパッチワークのように存在したイタリアより大幅に柔軟性を欠いていたため、宣長の思想、より一般的には

国学の思想の政治的な波紋が及ぶのが遅れたかもしれない。しかし、その影響は、いつかは及ぶ。例えば子安氏は、平田篤胤と本居宣長のレガシーは今日では異なると見るが、両者のレガシーは、特に戦後日本で過去を解釈する場合、日本のモダニティに関連づけられているとも強調する。⁵⁵ もちろん、国学の「国」は、「国」「領土」を意味する。そうならば、国学が政治的なものでなければ、何であると言うのか。

とはいえ、そう話は単純でもない。ヴァッラと宣長の評価を大きく異なるものにし、そう断定する要素は他にあるのだ。確かに、本居宣長本人や国学を信奉した多くの学者は、母国である日本列島の起源、特殊性、または優位性までも宗教的に描写をしていた。⁵⁶ しかし、現代の学者が、宣長をしばしば批評するのには、それ以外の要素が作用している。一つ考えられるのは、ヴァッラが合理主義に徹し、古代の文献を額面通りに受け取ることを拒んだこととは一線を画し、宣長や彼の門下生たちの一部は、文献をデリダ的観点で見ることには安住していた。例えば、宣長を「主情主義」と評価することは珍しくない。⁵⁷ キャロル・グラック氏が「民衆史学者」について、「一般的に」と前置きした上で、「社会制度的なものよりも感情的なものが関心事だ。(略)『精神史』とも呼ばれる知の営みの歴史に関係する事柄に(略)携わっていた」と見ていたのは記憶に新しい。⁵⁸ グラック氏の研究対象は色川大吉(1925~2021)や狩野政直などだが、国学と関連していることを明確にしている。⁵⁹ これらの解釈では、国学は一種のロマン主義で、欧州の文脈では、20世紀中頃の欧州の独裁者を歪んだ「舞台」へと導いたとも言われているのだ。恐らく同様の文脈で、マルクス主義者の知識人、ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)が「ファシズムが政治を美化する」と結論づけたように、大貫恵美子氏は、宣長が愛してやまなかった桜の花びらに20世紀ファシズムの湧き起こりを見たのだった。⁶⁰

しかし、ヴァッラに対しては、そのような「罪」を問わないのだろう。いずれにせよ、ヴァッラの文献学的、言語学的な再発見は、20世紀のいかがわしい革命派に支持されていた。宣長の再発見よりも、だ。イタリアのマルクス主義の革命派、アントニオ・グラムシ(1891~1937)は、「ルネッサンスの『言語問題』を、文化をめぐる政治問題として調べていた」とジョン・リーズ氏は記述している。⁶¹ さらに、リーズ氏はグラムシの「獄中ノート」について以下のように記している。

イタリア知的エリート of 政治的機能についての広範なエッセイを含んでいる。これらのエッセイが書かれた背後には、標準イタリア語(フィレンツェの方言)習得の正式な訓練が、民衆の政治闘争に必要なという考え方の広がり最大懸念の一つとしてあった。(略)グラムシは(略)反動的、または革新的な政治勢力に向けて人文主義の新ラテン語、もしくは土着語の選択肢を作っていた。⁶²

リーズ氏はグラムシの獄中ノートから以下を引用する。

どの言語も世界観の一部を成し、どんなコンテンツの外側も見境なく覆う単なる衣服ではない。それでは、二つの世界観は相反しているという意味ではないのか。ブルジョワ・民衆は、土着の言語で自己表現をし、貴族・領主はラテン語で自己表現をし、古代ローマに戻るのか。ルネッサンスは平和的に形作られ、勃興した文化というより、この対立によって特徴づけられていないのか。⁶³

ヴァッラは、才能あるラテン語学者だった。新ラテン語ではなく、古典ラテン語においてだ。だから、グラムシはヴァッラをブルジョワではなく、反動的と見なしていたかもし

れない。しかし、著者は、なぜかその反対だったのではないかと思う。というのも、ヴァッラは人文主義者の立場があり、彼の時代のスコラ哲学者を相手に（土着語！）で議論していたからだ。

とにかく、ヴァッラと宣長の比較において、グラムシの思想は厄介な問題を引き起こす。ヴァッラが古代の社会環境への回帰を望んでローマを振り返っていたとするなら、なぜ宣長も古代の日本について同様なことをしてはいけないのか。ちなみに、グラムシと同時代を生きたベニト・ムッソリーニ（1883～1945）（ムッソリーニをターゲットにした暗殺未遂とされる事件で、グラムシは投獄されている）もヴァッラと同じく、古代への回帰を政治的な目標としていた。また、中世ヨーロッパに生きた一人、パドヴァのマルシリウス（1270頃～1342）の言語に対する思想が、私が考えるように宣長の思想と類似性があると認められるとしたら、宣長がある学派では「ファシストの原型」と見做されているのに対して、なぜパドヴァのマルシリウスはそうではないのか。宣長は伊勢神宮をめぐる議論まで踏み込んだが、この議論は文献や正統性をめぐるもので、ヴァッラも自身を巻き込んだコンスタンティヌスの寄進状をめぐる議論と大きな類似性がある。⁶⁴ しかし、なぜか伊勢神宮について触れることで、宣長やその陣営に属することを「ファシストの原型」としてタブー視するのに対して、ヴァッラがコンスタンティヌスの寄進状をめぐる論争について明確な答えを出したことは、彼の評判を高めることにしかなかった。

上記に引用した学者の一部が「知の営み」に関する西洋史と日本史の区別や比較を行ったが、全ての学者が同じように考えているわけではない。例えば、日本史の研究で高い評価を集めるベン＝アミー・シロニー氏は、本稿で言及した大貫恵美子氏の書籍についての書評を寄せている。同氏は、大貫氏の日本に関する主張について、「愛国心は自然で、高尚なものとし、国家主義は悪だと非難し、区別することは、歴史学上では意味を持たない」と指摘している。⁶⁵ また、「戦前の日本のリベラルが国家主義を擁護した事実（大貫氏にとって）驚くべきことではないだろう。またその事実の理由として、多くの日本人の歴史学者がそうするように、『封建制度の残党』の存在があるからだ（彼女に）説明する必要はない」とシロニー氏は記述している。⁶⁶ リチャード・H・マイニア氏は、エラスムスと荻生徂徠の比較の有効性を認め、「ヨーロッパのキリスト教的人文主義者（つまり、エラスムス）と日本の評価の高い儒学者（つまり徂徠）は同じような状況に直面し、同じような方法でそれを解決した」と記述している。さらに、「もしヨーロッパのキリスト教的人文主義者が世界的な評価を受けるのなら、おそらく、この日本儒学者・モラリストも真剣な注目に値するのではないか」とも。⁶⁷ 筆者も全く同じ考えだ。丸山眞男氏（1914～1996）さえも、徂徠と宗教改革の進展とともに現れたヨーロッパの前近代主義との類似性を認めたことは特筆に値する。⁶⁸

徂徠について丸山氏が発見したことについて、江戸時代の分野で評価の高い研究を行う二人の米国の学者、ハリー・ハルトゥーニアン氏とヘルマン・オームス氏が、「束縛から解き放す見解」と記述している。しかし、その先にある宣長と「日本の特異性」については、なぜその分析を曇らせるかは明確ではない。⁶⁹ 「政治思想の分野で日本固有のモダニティのルーツを掘り起こすことで、丸山は、『日本の特異性を掲げ、モダニティという病気を克服する』と主張する超国家主義者の攻撃から近代の価値を救出しようとした」と、オームス氏とハルトゥーニアン氏は主張する。⁷⁰ しかし、なぜ本居宣長から日本を救出す

べきか説明されていない。アントニオ・グラムシが彼を称賛したという事実があっても、イタリアをヴァッラから解放せよというような試みは、筆者が知る限り無い。

同様に、日本の文化に貼られた「国家のナルシシズム」というレッテルは、西洋の類似した文化が明らかに受容されていることと矛盾している。⁷¹ 日本の宗教を研究する著名な学者、ロバート・N・ベラー(1927~2013)は、福沢諭吉(1835~1901)や内村鑑三(1861~1930)を「日本の国家主義者」として称賛するが、彼らは「日本中心主義者」ではないという位置付けに基づいている。この区別は、他の国について語るときより、日本について、特に戦後の視点から語るときにより頻繁になされるように思える。⁷² ベラーが家永三郎(1913~2002)についても数カ所にわたり称えているが、功罪いずれにせよ、許容すべきだろう。⁷³ というのも、それ自体が物語っていることがあるからだ。ヴァッラは、モノと心という本質的に異なる実体があるとする実体二元論が出現する前に執筆活動をしていし、宣長もルネ・デカルト(1596~1650)以降に生まれてはいるが、実体二元論については知らなかったであろう。⁷⁴ そのことが、ヴァッラに対しては見られない、宣長に対する偏見への説明の一助になるだろう。今日の西洋の学者は、自身が自覚しているにせよ、いないにせよ、15世紀にヴァッラが始めた同じ路線で活動しているように見える。⁷⁵ ヴァッラと宣長の評価をめぐる政治的な要素は、我々が理解しているより広く、かつ深いかもしれない。

結論

ロレンツォ・ヴァッラと本居宣長は、ともに同様な知的かつ政治的な探究の道歩んだ。そうであるならば、なぜ今日の西洋で、両者の置かれた文化的、歴史的環境について異なる扱いがなされているのだろうか。本研究で筆者は、西洋人がほとんど無意識に持つ、「自身の文化に優位性がある」との思い込みが原因だと結論付けられないわけにはいかない。それ以外に、両者が同様な知的世界で、同様な知的作業をしたのにも関わらず、評価に大きな差が生まれていることを説明できるのか。西洋の学界でヴァッラと宣長の史学史上の評価が大きく異なることは、日本や西洋以外の国々、その宗教全体に対する深い偏見を露呈しているように見える。ヴァッラはスコラ哲学に疑問を呈し、ローマの栄光を復活させようとした人文主義者で、西洋人はこの二つの事柄を深く熟知している。対照的に、宣長は彼らにとって、考古学的な「中国」層の下に埋もれる、ある種の「日本」を再発見しようとした、「ファシストの原型」だった。

今後、日本と西洋の古典を研究する思想家を比較する本稿のようなエッセイが出てくるのが望まれる。リチャード・マイニア氏は大切な点に留意した。知の営みについての歴史や史学史を比較することは、過去の世界の真実を明らかにするばかりではなく、今日我々の住む世界についても真実を明らかにする。例えば、両者に差異ないように見える「ファシズム」と「人文主義」について、歴史観が二極化している今日の世界でもだ。

注

- 1 See, e.g., <https://www.loc.gov/exhibits/vatican/humanism.html>, accessed December 23, 2021
- 2 “In [the Donation of Constantine], it was alleged that the Emperor Constantine had recognized the Pope as Christ’s vicar on earth and made all bishops subject to him; that he had bestowed on the Pope the rank and ceremonial dress of an emperor, and on the Roman clergy those of the senate; and that he had made over the imperial palace of the Lateran to the Pope, together with the government of Rome and all Italy.” R.H.C. Davis, *A History of Medieval Europe: From Constantine to St. Louis* (Essex, England: Longman, 1970), p. 135
- 3 石坂尚武、「ロレンツォ・ヴァッラの人文主義と『快樂論』:キリスト教と異教文化の統合」、史林、74巻、5号(1991年)、608頁
- 4 See, e.g., 岩本芳雄後註、『本居宣長、平田篤胤集』、東京、玉川大学出版部、昭和40年、3–15頁、家永三郎他校註、『日本古典文學大系97:近世思想家文集』、東京、岩波書店、14–15頁、白田甚五郎校訂、『国學大系第三巻:本居宣長集』、東京、地平社、昭和18年。
- 5 See Purushottama Bilimoria, “Demythologizing and Remythologizing *Tama*: Reading Tomoko Iwasawa’s *Tama in Japanese Myth*,” *Existenz*, vol. 7, no. 2 (Fall 2012), p. 16, and Tomoko Iwasawa, *Tama in Japanese Myth: A Hermeneutical Study of Ancient Japanese Divinity* (Lanham, Maryland: University Press of America, 2011) generally.
- 6 On the variety of meanings of “humanism” in Japanese intellectual life, see Francesco Campagnola, “Crisis and Renaissance in Post-War Japan,” *Modern Intellectual History*, vol. 15, no. 2 (2018), pp. 535-559. For a brief review of works by J.G.A. Pocock, Anthony Grafton, and other “humanism” historians in the West and the place of humanism in Western scholarship and cultural awareness, see Q. Edward Wang, “Beyond East and West: Antiquarianism, Evidential Learning, and Global Trends in Historical Study,” *Journal of World History*, vol. 19, no. 4 (2008), pp. 492-496.
- 7 And not only Western histories. Japanese Marxist Karatani Kōjin finds unnerving Bruno Taut’s “affirm[ation]” of Norinaga’s views. See Karatani Kōjin, tr. Joseph A. Murphy, “Buddhism, Marxism and Fascism in Japanese Intellectual Discourse in the 1930’s and 1940’s: Sakaguchi Angō and Takeda Taijun,” in Livia Monnet, ed., *Approches critiques de la pensée japonaise du xxe siècle* (Montréal: Presses de l’Université de Montréal, 2001), paragraph 29. Available at <http://books.openedition.org/pum/19839>. Accessed December 30, 2021. See also, on Kaneko Mitsuharu, Brij Tankha, “Japan in Asia: questioning state-sponsored Asianism,” in Anne Cheng and Sanjit Kumar, eds., *Historians of Asia on Political Violence* (Paris: Collège de France, 2021), paragraph 46. Available at: <http://books.openedition.org/cdf/11327>. Accessed December 30, 2021.
- 8 Nationalism also comes in for such a treatment, being linked to one of several Tokugawa schools of thought. See, e.g., George M. Wilson’s views on Kita Ikki and the Mito School, Rangaku, and Jitsugaku, glossed in Kenneth B. Pyle, “A Symposium on Japanese Nationalism: Introduction: Some Recent Approaches to Japanese Nationalism,” *Journal of Asian Studies*, vol. 31, no. 1 (November 1971), p. 6.
- 9 “Lorenzo Valla,” Stanford Encyclopedia of Philosophy, July 21, 2021, accessed December 21, 2021
- 10 Anthony Kenny, *A New History of Western Philosophy* (Oxford, England: Clarendon Press / Oxford University Press, 2010), pp. 492-493. But see Christopher S. Celenza, “Lorenzo Valla, ‘Paganism’, and Orthodoxy,” *MLN*, vol. 119, no. 1 (January 2004), pp. S66-S67.
- 11 Christopher S. Celenza, “Lorenzo Valla, ‘Paganism’, and Orthodoxy,” *MLN*, vol. 119, no. 1 (January 2004), pp. S76-S77
- 12 See Ronald K. Delph, “Valla Grammaticus, Agostino Steuco, and the Donation of Constantine,” *Journal of the History of Ideas*, vol. 57, no. 1 (January 1966), pp. 55-77 for a good overview of the controversy surrounding Valla’s initial foray into the philological critique of the Donation.
- 13 Maude Vanhaelen, “Review of Salvatore I. Camporeale, ed. Patrick Baker and Christopher S.

- Celenza, *Christianity, Latinity, and Culture: Two Studies on Lorenzo Valla* (Studies in the History of Christian Traditions, 172) (Leiden, the Netherlands: Brill, 2014),” *Journal of Ecclesiastical History*, vol. 66, no. 3, p. 648
- 14 See Paul Richard Blum, “Review of Christopher S. Celenza, *The Lost Italian Renaissance: Humanists, Historians, and Latin’s Legacy* (Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins University Press, 2004),” *Journal of the History of Philosophy*, vol. 43, no. 4 (October 2005), p. 486.
 - 15 Maude Vanhaelen, “Review of Salvatore I. Camporeale, ed. Patrick Baker and Christopher S. Celenza, *Christianity, Latinity, and Culture: Two Studies on Lorenzo Valla* (Studies in the History of Christian Traditions, 172) (Leiden, the Netherlands: Brill, 2014),” *Journal of Ecclesiastical History*, vol. 66, no. 3, p. 648
 - 16 Ian Hunter, “Hayden White’s Philosophical History,” *New Literary History*, vol. 45 (2014), pp. 338-339
 - 17 Nancy Struever, “Garin, Camporeale, and the Recovery of Renaissance Rhetoric,” *MLN*, vol. 119, no. 1 (January 2004), p. S49
 - 18 See Susanna Barsella, “The Myth of Prometheus in Giovanni Boccaccio’s *Decameron*,” *MLN*, vol. 119, no. 1 (2004), pp. S121-S122.
 - 19 See Albert Rabil, “Review Essay: Humanism in Practice, Influence, and Oblivion,” *Renaissance Quarterly*, vol. 54, no. 3 (Autumn 2001), pp. 914-927.
 - 20 Marco Sgarbi, “Review of Lodi Nauta, *In Defense of Common Sense: Lorenzo Valla’s Humanist Critique of Scholastic Philosophy*,” *Renaissance Quarterly*, vol. 64, no. 3 (Fall 2011), p. 876
 - 21 Marco Sgarbi, “Review of Lodi Nauta, *In Defense of Common Sense: Lorenzo Valla’s Humanist Critique of Scholastic Philosophy*,” *Renaissance Quarterly*, vol. 64, no. 3 (Fall 2011), p. 876
 - 22 Virginia Cox, “Rhetoric and Humanism in Quattrocento Venice,” *Renaissance Quarterly*, vol. 56, no. 3 (Autumn 2003), p. 675, citing Margaret L. King, *Venetian Humanism in an Age of Patrician Dominance* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1986), pp. 225-231
 - 23 But see John Monfasani, “Was Valla an Ordinary Language Philosopher?” *Journal of the History of Ideas*, vol. 50, no. 2 (April-June 1989), pp. 309-323, cited also in David Marsh, “Review of John Monfasani, *Language and Learning in Renaissance Italy: Selected Articles* (Variorum Collected Studies Series CS 460) (Brookfield, Vermont: Ashgate, 1994),” *Renaissance Quarterly*, vol. 50, no. 2 (Summer 1997), p. 591.
 - 24 Karin Susan Fester, “Review of Alan Perreiah, *Renaissance Truths: Humanism, Scholasticism and the Search for the Perfect Language* (Farnham, Surrey and Burlington, Vermont: Ashgate, 2014),” *Seventeenth-Century News*, vol. 74, nos. 3&4 (Winter 2016), p. 112, citing p. 16 in the Perreiah volume
 - 25 Karin Susan Fester, “Review of Alan Perreiah, *Renaissance Truths: Humanism, Scholasticism and the Search for the Perfect Language* (Farnham, Surrey and Burlington, Vermont: Ashgate, 2014),” *Seventeenth-Century News*, vol. 74, nos. 3&4 (Winter 2016), p. 115, citing pp. 43 and 60 in the Perreiah volume. Quintilian was not the only Roman author lauded by the Renaissance humanists. See, e.g., John Leeds, “Against the Vernacular: Ciceronian Formalism and the Problem of the Individual,” *Texas Studies in Literature and Language*, vol. 46, no. 1 (Spring 2004), pp. 107-148.
 - 26 Karin Susan Fester, “Review of Alan Perreiah, *Renaissance Truths: Humanism, Scholasticism and the Search for the Perfect Language* (Farnham, Surrey and Burlington, Vermont: Ashgate, 2014),” *Seventeenth-Century News*, vol. 74, nos. 3&4 (Winter 2016), p. 116, citing p. 60 in the Perreiah volume. Emphasis in original.
 - 27 Peter Redpath, “The Homeschool Renaissance and the Battle of the Arts,” *Classical Homeschooling Magazine*, Issue 2, nd, np, citing Peter A. Redpath, *Wisdom’s Odyssey from Philosophy to Transcendental Sophistry* (Amsterdam and Atlanta: Editions Rodopi, 1997), p. 106. Available at: <https://www.angelicum.net/classical-homeschooling-magazine/second-issue/the-homeschool-renaissance-and-the-battle-of-the-arts-by-peter-a-redpath/>. Last accessed December 29, 2021. On Valla’s philological projects, see also Riccardo Fubini, tr. Martha King, *Humanism*

- and *Secularization: From Petrarch to Valla* (Durham, NC: Duke University Press, 2003), pp. 36-42.
- 28 Mary Jane Barnett, "Erasmus and the Hermeneutics of Linguistic Praxis," *Renaissance Quarterly*, vol. 49, no. 3 (Autumn 1996), p. 542, citing inter alia Erasums, trans. Charles Fantazzi, *The Handbook of the Christian Soldier. Enchiridion, Collected Works of Erasmus*, vol. 66 (Toronto, 1988), p. 32, and Erasmus, ed. Felix Heinimann, Emanuel Kienzle, and Jacques Chomorat, *The Handbook of the Christian Soldier. Enchiridion, Collected Works of Erasmus*, vol. 5 (Amsterdam, 1969), pp. 248, 128-250, and 132. On Christ as Word, or Logos, see Mary Jane Barnett, "Erasmus and the Hermeneutics of Linguistic Praxis," *Renaissance Quarterly*, vol. 49, no. 3 (Autumn 1996), p. 550, citing Erasmus, ed. Hajo and Annemarie Holborn, *Ratio verae theologiae, in Desiderius Erasmus Roterodamus: Ausgewählte Werke* (Munich, 1933), p. 211.
- 29 Mary Jane Barnett, "Erasmus and the Hermeneutics of Linguistic Praxis," *Renaissance Quarterly*, vol. 49, no. 3 (Autumn 1996), p. 561, citing inter alia "Erasmus to Leo X, letter 384 (1516)," in Erasmus, trans. R.A.B. Mynors and D.F.S. Thomson, *The Correspondence of Erasmus: Letters 1 to 141, 1484-1500* [sic], *Collected Works of Erasmus*, vol. 1 (Toronto, 1974), lines 44-55. (Given the date and letter number of the correspondence cited, Barnett may mean to cite Erasmus, trans. R.A.B. Mynors and D.F.S. Thomson, *The Correspondence of Erasmus: Letters 298 to 445, 1514-1516, Collected Works of Erasmus*, vol. 3 (Toronto, 1976).) See also Lodi Nauta, "Anti-Essentialism and the Rhetoricization of Knowledge: Mario Nizolio's Humanist Attack on Universals," *Renaissance Quarterly*, vol. 65, no. 1 (Spring 2012), pp. 31-66. See, as well, the works of William of Ockham.
- 30 Speaking of Ogyū Sorai, Richard H. Minear writes, "He who would study the Way must be a sophisticated philologist." Richard H. Minear, "Ogyū Sorai's *Instructions for Students: A Translation and Commentary*," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 36 (1976), p. 39
- 31 James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo, eds., *Japanese Philosophy: A Sourcebook* (Honolulu, Hawai'i: University of Hawai'i Press, 2011), p. 472
- 32 James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo, eds., *Japanese Philosophy: A Sourcebook* (Honolulu, Hawai'i: University of Hawai'i Press, 2011), p. 472, Mark Teeuwen, "Shinto and Native Studies: Overview," in James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo, eds., *Japanese Philosophy: A Sourcebook* (Honolulu, Hawai'i: University of Hawai'i Press, 2011), pp. 458-459, and John S. Brownlee, "The Jeweled Comb-Box: Motoori Norinaga's *Tamakushige*," *Monumenta Nipponica*, vol. 43, no. 1 (Spring 1988), p. 36.
- 33 See Takashi Shogimen, "Marsilius of Padua and Ogyū Sorai: Community and Language in the Political Discourse in Late Medieval Europe and Tokugawa Japan," *The Review of Politics*, vol. 64, no. 3 (Summer 2002), pp. 497-523.
- 34 See generally Susan L. Burns, *Before the Nation: Kokugaku and the Imagining of Community in Early Modern Japan* (Durham, North Carolina: Duke University Press, 2003), and Mark McNally, *Proving the Way: Conflict and Paradise in the History of Japanese Nativism* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2005). See also Ilma Sawindra Janti, "Edo jidai ni okeru Kokugaku shisō to sono ningenkan: Motoori Norinaga no 'tadabito' wo chūshin toshite," *Kokushi Daigaku Daigakuin Seikei Ronshū* 15 (March 2012), pp. 91-117.
- 35 See, e.g., Wung Cheng Chim, "George Berkeley and Motoori Norinaga on Other Minds and There Being 'Nothing to Be Done'," *Comparative Philosophy*, vol. 12, no. 1 (2021), p. 56, on "karagokoro".
- 36 Mark Teeuwen, "Shinto and Native Studies: Overview," in James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo, eds., *Japanese Philosophy: A Sourcebook* (Honolulu, Hawai'i: University of Hawai'i Press, 2011), p. 457. See also Susanna Fessler, "The Nature of the Kami: Ueda Akinari and *Tandai Shōshin Roku*," *Monumenta Nipponica*, vol. 51, no. 1 (Spring 1996), pp. 1-15, for a discussion of *kami* views among other Kokugaku scholars during Motoori's time, and Isomae Jun'ichi, "Myth in Metamorphosis: Ancient and Medieval Versions of the Yamatotakeru Legend," *Monumenta Nipponica*, vol. 54, no. 3 (Autumn 1999), pp. 361-385, for more about Kokugaku and the re-evaluation of the *Kojiki* and *Nihon Shoki*.
- 37 Mark Teeuwen, "Shinto and Native Studies: Overview," in James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo, eds., *Japanese Philosophy: A Sourcebook* (Honolulu, Hawai'i: University of

- Hawai'i Press, 2011), p. 457
- 38 Mark Teeuwen, "Shinto and Native Studies: Overview," in James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo, eds., *Japanese Philosophy: A Sourcebook* (Honolulu, Hawai'i: University of Hawai'i Press, 2011), p. 457
- 39 But see, on Teeuwen's call for nuancing between Kokugaku and "nativism," Peter Flueckiger, "Reflections on the Meaning of Our Country: Kamo no Mabuchi's *Kokuikō*," *Monumenta Nipponica*, vol. 63, no. 2 (Autumn 2008), p. 212.
- 40 See, e.g., Shōzō Kōno, "Kannagara no Michi," *Monumenta Nipponica*, vol. 3, no. 2 (July 1940), p. 12.
- 41 On the links between putative fascist Rōyama Masamichi and Kokugaku, for example, see Miles Fletcher, "Intellectuals and Fascism in Early Showa Japan," *Journal of Asian Studies*, vol. 39, no. 1 (November 1979), p. 55.
- 42 子安宣邦、『本居宣長』、東京、岩波新書、1992年、p. 2、山下久夫、『本居宣長』（コレクション日本歌人選 058）、東京、笹間書院、2012年、p. 4. See also 平田篤胤著、子安宣邦校注、『霊の真柱』、東京、岩波書店、1998年。
- 43 石川淳、『日本の名著21：本居宣長』、東京、中央公論社、1970年、p. 8
- 44 子安宣邦、『本居宣長』、東京、岩波新書、1992年、p. 2. By 「明治のごく初期の「祭政一致」など」 Koyasu may be referring to Ōkuni Takamasa (1792-1871). See Mark Teeuwen, "Shinto and Native Studies: Overview," in James W. Heisig, Thomas P. Kasulis, and John C. Maraldo, eds., *Japanese Philosophy: A Sourcebook* (Honolulu, Hawai'i: University of Hawai'i Press, 2011), pp. 463-464. See also 波田永実、「大国隆正の歴史認識と政治思想」、『流通経済大学法学部流経法学』第13巻、第1号（2013年9月）、1-60頁、小川寛大、「国家と切り結んだ『国粹主義者』」、『国体文化』、第1164号、令和3年5月、24-25頁、相澤宏明、「明治維新における国体意識の発露（上）」、『国体文化』、第1165号、令和3年6月、42-46頁、相澤宏明、「日本の近代は明治人が創った」、『国体文化』、第1167号、令和3年8月、32-36頁、and Michael C. Brownstein, "From *Kokugaku* to *Kokubungaku*: Canon-Formation in the Meiji Period," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 47, no. 2 (December 1987), pp. 436-438.
- 45 石川淳、『日本の名著21：本居宣長』、東京、中央公論社、1970年、p. 14
- 46 See Marjorie O'Rourke Boyle, "Machiavelli and the Politics of Grace," *MLN*, vol. 119, no. 1 (January 2004), pp. S225-S226.
- 47 Sarah Stever Gravelle, "A New Theory of Truth," *Journal of the History of Ideas*, vol. 50, no. 2 (April-June 1989), p. 335
- 48 Melissa Meriam Bullard, "The Renaissance Project of Knowing: Lorenzo Valla and Salvatore Camporeale's Contributions to the *Querelle* Between Rhetoric and Philosophy," *Journal of the History of Ideas*, vol. 66, no. 4 (October 2005), pp. 479-480, citing Salvatore I. Camporeale, *Lorenzo Valla: Umanesimo e teologia* (Florence, 1972), p. 6
- 49 See, e.g., Charles Trinkaus, "*Antiquitas Versus Modernitas*: An Italian Humanist Polemic and Its Resonance," *Journal of the History of Ideas*, vol. 48, no. 1 (January-March 1987), pp. 12-14, and Mark Jurdjevic, "Civic Humanism and the Rise of the Medici," *Renaissance Quarterly*, vol. 52, no. 4 (Winter 1999), pp. 994-1020, esp. pp. 1000-1002 for a discussion of various Italian Humanist views of ancient Rome in light of the contemporary between Florence and Milan.
- 50 This was of course a very common desire, especially during and after the Renaissance in northern Italy. See, e.g., John K. Yost, "Tyndale's Use of the Fathers: A Note on His Connection to Northern Humanism," *Moreana*, vol. 6, no. 21, issue 1 (February 1969), pp. 5-13. Judith Butler would perhaps counter that there is no lost "authentic" to rediscover. See Seth Larer, "Book Review Essay: Humanism, Philology and the Medievalist," *Postmedieval: A Journal of Medieval Cultural Studies*, vol. 5, no. 4 (2014), p. 509, citing and paraphrasing Judith Butler, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* (New York, New York: Routledge, 1990), pp. 175, 41.
- 51 See Mircea Diaconu, "Eliade's Contribution to the Philosophy of the Renaissance," *Journal for the Study of Religions and Ideologies*, vol. 20, iss. 59 (Summer 2021), p. 140. See also Timothy

- Kircher, "Humanism and Holiness: Leon Battista Alberti between Florence and Rome," *MLN*, vol. 128 (2013), pp. 1-19.
- 52 For Valla's influence on Erasmus and others, and for his position with the Protestant Reformation which would follow, see, e.g., Jorge Ledo, "The Recovery of Freedom of Speech in the Culture of Humanists and the Communicative Origins of the Reformation," *Traditio*, vol. 74 (2019), pp. 395-396. See also Stefan Bauer, "Review of Katherine Van Liere, Simon Ditchfield, and Howard Louthan, eds., *Sacred History: Uses of the Past in the Renaissance World* (New York, New York: Oxford University Press, 2012)," *Catholic Historical Review*, vol. 99 (2013), pp. 146-148; Bernd Renner, "Review of Marc van der Poel, ed. and trans., Rodolphe Agricola, *Écrits sur la dialectique et l'humanisme*, Textes de la Renaissance 18 (Paris: Classiques Garnier, 2018)," *Renaissance Quarterly*, vol. 73, no. 2 (July 2020), pp. 601; Juan Luis Monreal Pérez, "El uso de la lengua alemana y Latina en Alemania en el período del humanismo renacentista," *Estudios Románicos*, vol. 26 (2017), pp. 195-212; and Paul Richard Blum, "Review of Jill Kraye and M.W.F. Stone, eds., *Humanism and Early Modern Philosophy* (New York, New York: Routledge, 2000)," *Journal of the History of Philosophy*, vol. 40, no. 1 (January 2002), p. 121. On the tensions inherent in the philological and historiographical—and religious—project which Valla and other Renaissance humanists initiated, see, e.g., Ian Hunter, "Hayden White's Philosophical History," *New Literary History*, vol. 45 (2014), pp. 335-337.
- 53 See Peter L. McDermott, "Nicholas of Cusa: Continuity and Conciliation at the Council of Basel," *Church History*, vol. 67, no. 2 (June 1998), pp. 254-273.
- 54 David Marsh, "Review of Riccardo Fubini, tr. Martha King, *Humanism and Secularization from Petrarch to Valla* (Durham, North Carolina: Duke University Press, 2003)," *Clio*, vol. 32, no. 4 (Summer 2003), p. 486. See also Melissa Meriam Bullard, "The Renaissance Project of Knowing: Lorenzo Valla and Salvatore Camporeale's Contributions to the *Querelle* Between Rhetoric and Philosophy," *Journal of the History of Ideas*, vol. 66, no. 4 (October 2005), pp. 477-478.
- 55 子安宣邦、『本居宣長』、東京、岩波新書、1992年、pp. 2-3
- 56 See, e.g., 本居宣長著、村岡典嗣校訂、『玉くしげ、秘本玉くしげ』、東京、岩波書店、昭和9年、13頁、本居宣長著、村岡典嗣校訂、『うい山ふみ、鈴屋答問録』、東京、岩波書店、昭和9年、21-32頁。See also Motoori Norinaga, "Uiyamabumi," *Monumenta Nipponica*, vol. 42, no. 4 (Winter 1987), pp. 456-493 for an annotated translation of this work, and John S. Brownlee, "The Jeweled Comb-Box: Motoori Norinaga's Tamakushige," *Monumenta Nipponica*, vol. 43, no. 1 (Spring 1988), pp. 35-44 for an introduction to *Tamakushige*. See also Peter Flueckiger, "Reflections on the Meaning of Our Country: Kamo no Mabuchi's *Kokuikō*," *Monumenta Nipponica*, vol. 63, no. 2 (Autumn 2008), pp. 211-263, and, on Motoori's *Naobi no mitama* (1711), pp. 232-233.
- 57 Noguchi Takehiko, tr. Suzette A. Duncan, "Flowers with a Very Human Name: One *Kokugaku* Scholar Pursues the Truth about the Mysterious Death of Yūgao," in Michael K. Bordaugh, ed., *The Linguistic Turn in Contemporary Japanese Literary Studies: Politics, Language, Textuality* (Ann Arbor, Michigan: University of Michigan Press, 2010), pp. 28-30
- 58 Carol Gluck, "The People in History: Recent Trends in Japanese Historiography," *Journal of Asian Studies*, vol. 38, no. 1 (November 1978), p. 38
- 59 Carol Gluck, "The People in History: Recent Trends in Japanese Historiography," *Journal of Asian Studies*, vol. 38, no. 1 (November 1978), pp. 44-45
- 60 Ben-Ami Shillony, "Review of Emiko Ohnuki-Tierney, *Kamikaze, Cherry Blossoms, and Nationalisms: The Militarization of Aesthetics in Japanese History*," *Monumenta Nipponica*, vol. 58, no. 2 (Summer 2003), pp. 266, 264-265
- 61 John Leeds, "Against the Vernacular: Ciceronian Formalism and the Problem of the Individual," *Texas Studies in Literature and Language*, vol. 46, no. 1 (Spring 2004), p. 116
- 62 John Leeds, "Against the Vernacular: Ciceronian Formalism and the Problem of the Individual," *Texas Studies in Literature and Language*, vol. 46, no. 1 (Spring 2004), pp. 116-117
- 63 John Leeds, "Against the Vernacular: Ciceronian Formalism and the Problem of the Individual," *Texas Studies in Literature and Language*, vol. 46, no. 1 (Spring 2004), p. 117, quoting Antonio

- Gramsci, trans. William Boelhower, eds. David Forgacs and Geoffrey Nowell-Smith, *Selections from Cultural Writings* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1985), p. 226
- 64 See John Allen Tucker, "Review of Motoori Norinaga, tr. Mark Teeuwen, 'The Two Shrines of Ise: An Essay of Split Bamboo' (Weisbaden: Harrassowitz, 1995)," *Monumenta Nipponica*, vol. 51, no. 1 (Spring 1996), pp. 123-124.
- 65 Ben-Ami Shillony, "Review of Emiko Ohnuki-Tierney, *Kamikaze, Cherry Blossoms, and Nationalisms: The Militarization of Aesthetics in Japanese History*," *Monumenta Nipponica*, vol. 58, no. 2 (Summer 2003), p. 266
- 66 Ben-Ami Shillony, "Review of Emiko Ohnuki-Tierney, *Kamikaze, Cherry Blossoms, and Nationalisms: The Militarization of Aesthetics in Japanese History*," *Monumenta Nipponica*, vol. 58, no. 2 (Summer 2003), p. 266
- 67 Richard H. Minear, "Ogyū Sorai's *Instructions for Students*: A Translation and Commentary," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 36 (1976), p. 49
- 68 Takashi Shogimen, "Marsilius of Padua and Ogyu Sorai: Community and Language in the Political Discourse in Late Medieval Europe and Tokugawa Japan," *The Review of Politics*, vol. 64, no. 3 (Summer 2002), pp. 499-501, citing inter alia Maruyama Masao, tr. Mikiso Hane, *Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1974), chapters 1 and 2.
- 69 Herman Ooms and H.D. Harootunian, "Review Article: Maruyama's Achievement: Two Views," *Journal of Asian Studies*, vol. 36, no. 3 (May 1977), p. 521
- 70 Herman Ooms and H.D. Harootunian, "Review Article: Maruyama's Achievement: Two Views," *Journal of Asian Studies*, vol. 36, no. 3 (May 1977), p. 522
- 71 George DeVos, "national narcissism," cited in Robert N. Bellah, "Japan's Cultural Identity: Some Reflections on the Work of Watsuji Tetsuro," *Journal of Asian Studies*, vol. 24, no. 4 (August 1965), p. 573
- 72 Robert N. Bellah, "Japan's Cultural Identity: Some Reflections on the Work of Watsuji Tetsuro," *Journal of Asian Studies*, vol. 24, no. 4 (August 1965), pp. 574-575
- 73 See, e.g., Robert N. Bellah, "Japan's Cultural Identity: Some Reflections on the Work of Watsuji Tetsuro," *Journal of Asian Studies*, vol. 24, no. 4 (August 1965), p. 577.
- 74 See Christopher S. Celenza, "Lorenzo Valla and the *Traditions and Transmissions of Philosophy*," *Journal of the History of Ideas*, vol. 66, no. 4 (October 2005), p. 484.
- 75 See Seth Larer, "Book Review Essay: Humanism, Philology and the Medievalist," *Postmedieval: A Journal of Medieval Cultural Studies*, vol. 5, no. 4 (2014), pp. 502-504.